令和３年度・令和４年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（検証協力校）研究成果報告書

１　学校紹介

本校は銚子電鉄本銚子駅に隣接し、校舎のある台地に広がる住宅地域・農業地域と、学校から見下ろす利根川河口に広がる低地の商業地域に二分される。本学区は市内でも住宅密集度が高い地域であるが、児童数は年々減少し、現在は各学年１クラスとなっている。全国や県の学力調査において、国や県の平均との差は大きく、学力向上は課題となっている。学習活動を展開する各校舎は、明るく清潔で学習環境として最適である。敷地内にはグラウンド、中庭、前庭など児童が活動できる場所があり、休み時間は多くの児童が外遊びをしている。

２　研究主題

主体的に学び、表現する力を高める国語科指導 ～書く活動を通して～

３　研究の概要

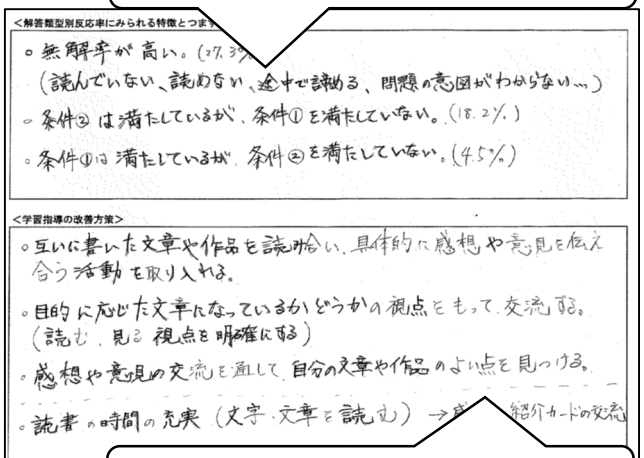
（１）児童生徒の実態と課題

本校児童は活動性に富み、好奇心が旺盛である。授業や家庭学習では指示された課題にはきちんと取り組めるが、進んで課題を見つけたり、計画的に学習をしたりすること等に課題がある。また、基本的な生活習慣の乱れや学習用具の不揃い等による学習意欲の低下は、学習活動を進めるうえで課題となっている。さらに、どの学級にも学習への取組や学習内容の理解に支援を要する児童が複数在籍しており、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業や特別支援教育の推進も課題である。

全国学力・学習状況調査（国語科）では、国や県と同様に「読むこと」「記述式」での正答率が低い結果である。「書くこと」の領域についても昨年同様低い傾向にあった。特に、目的に応じて文章を読み書きしたり、文章や図表等を結び付けて表現したりすることに課題が見られる。また、自分の考えを表現するにあたり、必要条件を満たしていなかったり、解答することをあきらめてしまったりする傾向にあることは依然として課題である。

全職員で行う研修（全国学調の誤答分析）
分析 ⇒ 授業改善

解答の特徴とつまずきの分析



学習指導の改善方策

（２）学力向上のための取組

【「書くこと」に重点を置いた授業改善】

〇第３学年　国語科「しみずっ子オリジナル生き物ブックを作ろう」

言 語 活 動：相手や目的を意識して、経験したことや想像したことから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にして「生き物ブック」を作って交流する。

指導の工夫：①教師見本「オリジナル生き物ブック」の作成・提示

・学習の流れとゴールを想定し、教師見本と単元計画を作成する。

・学習意欲を高めるとともに学習の見通しをもてるように、単元導入時に提示する。

②交流の場の設定

・要点や必要な説明、説明と関係のある絵が描けているかを見直す時間を設ける。

・友達の良い点やアドバイスを伝えるために付箋紙を活用する。

児童の様子：オリジナル生き物ブック作成という目的意識と、低学年に紹介するという相手意識があることで、単元を通して意欲が持続し、粘り強く書く活動に取り組む姿が見られた。

工夫①　教師見本「オリジナル生き物ブック」と単元計画

工夫②　互いの作品を読み合う活動

工夫②　アドバイスをもとに修正

低学年に「しみずっ子オリジナル生き物ブック」の紹介（発表会）

○第４学年　国語科「自分だけの短歌を作ろう」

言 語 活 動：経験や想像したことなどから書くことを選び、自分の言葉で短歌を作って交流する。

指導の工夫：①教師見本の作成・提示

・学習のゴールを想定し、児童にとって身近な言葉を選び教師見本を作成する。

・単元導入時に提示することで学習意欲を高めるとともに短歌を作るという具体的なイメージがもてるようにする。

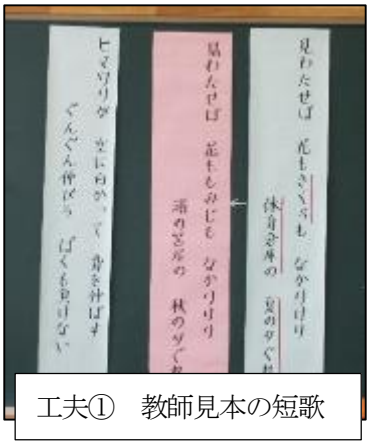
②交流の場の設定

・自分の作った短歌集を友達と読み合う場面を学習の単元末に設定する。

・短歌作りに生かせるように、学級で身近な五音、七音の言葉集めをする。

・いろいろな表現に触れられるように、毎時間ペアで作品を読み合う時間を設定する。

児童の様子：自分だけの短歌を作るという目的意識が、言葉集めやペアでの交流を活発にし、紹介する相手を意識した活動へとつながっていった。「より伝わりやすい言葉は何か」を考えながら作品作りをする児童が増えた。



工夫①　教師見本の短歌

工夫②　互いの作品を交流

工夫②　五音、七音の言葉集め

【学びに向かう基本的な姿勢の確立】

○年３回の学力向上推進週間の実施…学校と家庭の役割を明確にし、連携した取組

事前　…　児童への周知（全校集会）

家庭への周知（学力向上たより）

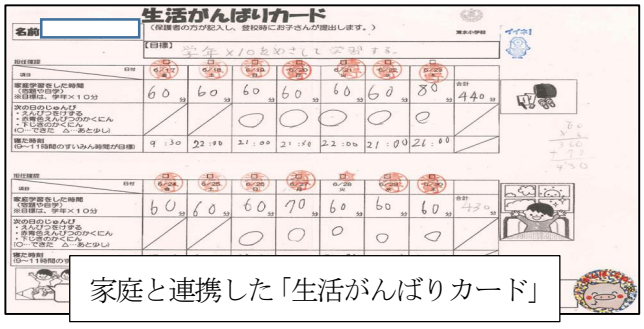
学校　…　学習のしみっつ（話の聞き方、下敷きの使用、学習問題とまとめ）+α（自分の考え）

「学習がんばりカード」を使用し、毎日振り返りを行う。

家庭　…　生活のしみっつ（家庭学習は学年×１０分、翌日の準備、就寝時間の管理）

「生活がんばりカード」を使用し、家庭におけるよりよい学習環境づくりを促す。

事後　…　取組状況（各カードの集計、考察、児童の様子）を家庭へ周知（学力向上たより）



家庭と連携した「生活がんばりカード」

家庭学習の様子を全校で共有

（３）加配教員（学習サポーターを含む）の活用

【指導体制】

〇専科教科…３～６年理科、３～６年図画工作科、６年社会科、６年家庭科、全学年書写

〇学習サポーター…３年生以上算数科

【運営上の工夫】

〇学習規律を統一することで、一貫した指導ができるようにする。

〇日課の変更は、教務が窓口となり、各担当に漏れ落ちのないように周知する。

【児童の変容】

〇専科教員の指導教科が絞られることで、教材研究が充実する。その結果、専門性を生かした授業と系統立てた指導が可能となった。毎回の授業にわくわく感がうまれることによる意欲の向上と、見通しをもてる学習計画により意欲の継続につながった。「理科が好き」「図画工作科が楽しみ」という声も聞こえる。

〇学習サポーターが入ることで、一層きめ細かな指導が可能となり、個別支援が充実した。児童がつまずく一歩手前やその瞬間に支援することで、児童の「わかった」「できた」につながった。高学年では、「算数がわかるようになった」という児童も増えている。

４　成果

〇学習のゴールとなるモデルの提示により、児童は学習の流れとゴールをイメージすることができ、学習意欲も継続した。また、指導者が事前に学習モデルを作成することは、児童のつまずきそうな場面や支援を明らかにすることができ、より細かな学習計画を立案することにつながった。

〇目標を明確にした学力向上推進週間の実施により、学びに向かう姿勢や家庭での学習時間の向上等、児童の情意面での変容が見られた。頑張ったことが結果につながり、学習習慣が身に付いてきた。

〇学習のまとめを自分で書く時間を確保することで、学習内容や思考の振り返りができる児童が増えている。次時への目的をもつことにもつながり、主体的に学習に取り組む姿が見られるようになった。

５　今後の課題

▲一人一人の児童が自分の考えを表現できるようにはなっているが、授業の中で他者と比較したり共有したりする場面が少ない。児童が新たな考えに気付き、自分の考えや学びを修正することができるような場面の充実を目指した授業改善が求められる。

▲児童が自分の考えを形成して、文章や言葉等で表現する時間を確保する。

▲学校の学力向上に向けた取組を家庭へ発信することにより、児童の家庭学習の習慣化と、学校と家庭の役割を明確にした連携の更なる充実を図る。